

摂食障害の子の親として

C氏（10代女性家族）

娘が食べられなくなったのは中学2年生の秋ごろだったと思いますが、その頃は気づくことが出来ませんでした。中3で塾に通い始めごはんの量が極端に減っていきましたが、私は受験のストレスかな？と暢気に様子を見ていました。高校の健康診断の結果32キロという数字を見たときにはじめて、今までののは、拒食症だったんだと気づきました。

気づかなかったことを後悔しましたが、後悔してもどうしようもないと思いなおし、まず本人を納得させて病院に連れて行こうと考えました。いきなり精神科や心療内科は本人が納得しづらいのではと思い、心理士さんがいてカウンセリングもしている婦人科に拒食状態ですと伝えて予約をいれました。2週間待ち、その間も状態は悪くなっていきましたが、本人とは向き合える時間ともなり、一人で頑張らないで助けてもらおうねと話しました。しかし受診すると「拒食症です。うちでは診れません。」「5年致死率9パーセントです。」と伝えられただけ、どこも紹介して貰えず途方にくれました。医大に關係している医師だと確認して受診したのに残念でした。そこからいろんな病院に電話をしましたが紹介状がないと無理、中学生なら診れたが高校生はダメ、逆に15歳ならこども扱いになるので診れない、他の合併症がないと診れない、33キロ以下は診れないなど軒並み断られてしまいました。二日間たくさん電話して「太田病院聞いてみたら」と教えてもらい予約が取れてホッとしたことを思い出します。初診時、私は入院も覚悟して行きましたが、本人の完璧主義なところを否定せず通学も続けられたことはとてもありがたかったです。その頃は「5年後に生きていて欲しい」「10年後に笑って欲しかったらいいな」と思っていました。今は、少しずつ笑顔も戻り、食べられる量も増えてきて、「通院めんどくさい」と言う元気もできましたし、大学生にもなりました。

振り返ってみて、親としてやってみたことは、まず医療の力をしっかりお借りすることです。次にとにかく少しでも食べられるように工夫しました。牛乳は嫌だとヨーグルトは許容できたので混ぜてラッシーにしてみたり、フルグラは少し食べられたのでこっそりナッツを足したりしました。お弁当も毎日ほぼ捨てていましたが、ごみにする覚悟で本人が抵抗ないものを詰めて持たせ続けました。少しずつ食べられるようになると、見た目を変えずに押し込んで量を少しずつ増やすとか姑息な手段も使いました。あとは本人の代わりに親と一緒にこだわらないこと、こだわっていること自体は否定しないことを心がけました。そして私が焦ったり急ぎたくなった時は、5年後も生きていて欲しいと願ったことを思い出すようにしています。

これからもまだまだいろいろあると思いますが、ゆっくり回復していってくれれば良いなと願っています。